私はこう考える

「遊ぶ」ことは「学ぶ」こと？

「遊び」とは？「学び」とは？

横井紘子

「学び」の文脈で「遊び」を語ること

「遊び」も「学び」も、非常に定義することが難しい言葉です。語る人が何者かによって、また状況によって、意味や価値が大きく変わります。例えば、「遊び」は「学び」の反義語としても、同義語としても使われます。また、ある特定の知識を習得することを「学び」ということもあれば、人生の経験すべてが「学び」といわれることもあります。

また、教育分野、とりわけ、幼児教育においては、両者の密接な関係がさまざまに論じられています。「遊び」を通した総合的な「学び」の実現を目的としているのですから、当然だともいえます。

しかし、「遊び」を「学び」の文脈に回収してしまうことに対して、ある種の抵抗感や不十分感、さらにいえば、どこか「うさんくささ」を感じる人も多いのではないでしょうか。

このすっきりしない感覚はなぜ生じるのでしょうか。そのことを考える上で、どうしても「遊びとは何だろう」という根本的な問いに向き合わざるを得ないのですが、まずは、身近にある事例から考えてみたいと思います。

「遊び」を通した「学び」って？

ある時、保育になじみのない教育関係者が幼稚園を参観した後に、「今日は遊びの中にたくさんの学び

を発見しました」と、話し始めました。そして、「レストランごっこでメニューを作っていました。これは文字の学習につながりますし、積み木を並べていくことは、立体図形の学習につながっています」と続けます。これは少し極端ですが、遊びと小学校以降の学習内容を照らし合わせ、つながりが認められる「遊び」の一部の行為を「学び」とする見方です。

これを聞いていた保育者は、「遊び」における「学び」はそういったものではないですよ、と話し始めます。「幼児期は人格形成の基礎となる、心情・意欲・態度を学びます。目に見えない部分ですが、遊びの中で人間関係も育みますし、さまざまな感情を体験して精神的にも成長します。小学校以降では学びは教科に細分化されていきますが、幼児期は総合的で全体的な学びが大切なのです」……などと、幼児教育独自の「学び」の特徴を伝えようとします。

加えて、「先ほどの○○ちゃんは、以前は遊びの中でも自分の思いを主張することがなかなかできないお子さんでしたが、最近になって……」と、一人ひとりの子どもの「学び」を「遊び」を通してとらえることもあります。

さらに、「遊びの中で運動能力が発達するのですね。やはり、遊びは子どものさまざまな側面の発達に有益な行為ですね」などという話が出るかもしれません。「発達」も、「学び」や「遊び」と関係付けられることが多い言葉です。

「学び」の文脈ではすくい切れない「遊び」

以上のように、「遊び」の中にあらゆる「学び」を認めるまなざしは、教育関係者の多くがもち合わせているものでしょう。見方や感じ方は異なっていても、「遊び」を有益なもの、教育的意義があるものとしてとらえている点では同様であるといえます。

ここで、それを否定するつもりはまったくありません。しかし、例えば、精神的な成長をしたり、運動能力が発達したりするのは、遊びの副産物であり、本質の部分ではないはずです。子どもたちは、精神的な成長、運動能力の発達といった目的の達成のた

めに遊んでいるわけではありません。

では、遊びの本質とはいったい何なのでしょうか。ここで、「遊びとは何か」という問いに向き合う必要が出てきます。この問いに答えることは簡単なことではありませんが、幾つかの説明を紹介します。

矢野[注1]は、「遊びはもともと有用性の秩序から離脱する自由な行為であり、遊びは遊ぶために遊ぶのであって、遊びを超える目的はない。しかし、教育の世界では、遊びが結果としてもたらす発達的効果をもって遊びの本質としてしまう」と指摘します。そして、「遊び」とは、自己と世界との境目がいつの間にかなくなって、世界の奥行きを感じる体験である「溶解体験」であると述べています。

ガダマー[注2]は、「遊び」は「自己を表現する以外の何ものでもない」ものだとし、西村[注3]は、特定の目的の達成を目指す世界とは不連続なものとして、「遊びの世界」の独自性を論じています。また、加用[注4]は、自我の変容があることが「遊び」だと言っています。

以上のように、「遊び」を「遊び」たらしめているのは、遊びの外部に目的を求め、有用性を追求するような「学び」の文脈ではすくい切れない部分にあるのではないでしょうか。そして、このような「遊び」の核の部分にこそ、人間の生を豊かにしてくれるものとして、さらに、子どもが世界と対話しながら自己を深めるものとして、「遊び」に特別な価値が認められてきた本来的な理由が隠れているのではないでしょうか。

「遊び」の必要性を語ることの困難さ

今、ここで改めて確認せずとも、「遊び」は人間の生を豊かにする価値ある行為だという認識は、昔より感覚的に理解され、共有されていたように思います。しかし、現代では、有用性・合理性・効率性が善とされ、さまざまなことを言語化・可視化し、評価・説明することが求められています。教育の世界においても、軌は同一だといえます。

そうなると、「遊び」は、無用で、非合理的で、算定不能で何が起こるかわからない、非効率的なもの

だと評価されがちです。そこで、子どもにとっての遊びの必要性を主張するため、「遊び」の有用性を可視化し、「遊び」は「学び」であることを説明する必要が出てきました。

しかし、「遊び」が有用であると語ること、言い換えれば、「学び」の文脈で「遊び」を語ることは、「遊び」の本質からすれば奇妙な事態です。本来は有用性とは異なる文脈で語られるはずの「遊び」が、有用性の文脈にからめとられる……私たちは、そこに違和感を抱くのでしょう。また、それを求められる事態に、抵抗を感じるのではないでしょうか。

だからといって、「遊び」は「学び」です、という一言で済ませ、内実を語ることを放棄してしまっていいのでしょうか。また、「遊び」の経験を有用性の枠での「学び」の経験に分解し、説明することで満足していいのでしょうか。

どちらも、「遊び」の体験の、何にも代え難い奥深さ、浮遊感、異様さ、面白さ、楽しさ、生き生きしさ、一体感（……どの言葉を使っても十分でない、もどかしさを感じますが）を語ることをあきらめてしまっているように思います。まずは、有用性という文脈での「学び」の呪縛からいったん離れて、幼児教育の「学び」の射程を編み直す必要性を、ある種の危機感とともに感じています。

しかし、たとえ、新しい「学び」のフィルターが出来たとしても、すくい切れない部分が必ず「遊び」にはあるでしょう。逆にそのすくい切れない部分があるからこそ「遊び」であるともいえます。常に「学び」から逃れていく「遊び」に遊ばれつつ、子どもと共に遊びながら、どうにかこうにか「遊び」を言葉にする……改めて、今、大切なことのように思います。

（十文字学園女子大学）

注

1 矢野智司『意味が躍動する生とは何か』世織書房 二〇〇六年

2 ハンス＝ゲオルグ・ガダマー『真理と方法Ⅰ』（轡田收 訳）法政大学出版局 一九八六年

3 西村清和『遊びの現象学』勁草書房 一九八九年

4 加用文男『子ども心と秋の空』ひとなる書房 一九九一年